



野々垣 翔太

NONOGAKI SHOUTA

1996年 愛知県一宮市出身
2019年 地域おこし協力隊として市内矢田地区に赴任

柏崎市矢田地区の地域おこし協力になってもうすぐ丸2年という野々垣 翔太さん。野々垣さんが育った愛知県一宮市は人口38万人。今春、中核市としてスタートした。

都会の住宅地で育った野々垣さんは外国や、家族旅行などで訪れた山や田んぼが広がる田舎の風景に非日常を感じ、子供の頃から強い憧れがあったという。

高校と外語大学在学時にオーストラリアへ留学した経験があり、卒業後は産業用ロボットなどを扱う会社に就職し営業職として働いていた。しかし、地方での暮らしを諦められず、移住相談や岐阜県内での就農体験を通して次第に農業にも興味を持つようになったという。

そんな中、地域おこし協力隊の活動を知り、矢田地区のおためし体験を経て面接を受けたところ採用が決まり、そこから協力隊としての新しい生活が始まった。

野々垣さんの仕事は主に矢田営農組合での作業が中心となる。水稻や枝豆、マコモタケ、オータムポエムといった営農組合の主力作物に加え、季節の野菜などの作付けや育成、収穫を行う。また、地域での活動や草刈りなどにも積極的に参加して

いる。

仕事を始めてみたら農業のほうが自分にとって違和感がなかったと、日焼けした顔で話す野々垣さん。「農業は人間が管理していますが太陽や風、土、水をエネルギーに、育つのは植物の力。夏の作業は暑い冬は寒いですが、それが自分にとっては心地良い」とほほ笑む。協力隊という立場から、営農組合の従業員とは違う視点で農業に取り組めたらという気持ちの一方で、それがなかなか見つけられないというのが今、一番の悩みどころだと本音も漏らす。

2年間の協力隊生活で都会とは全く違う村の生活を体験した。「お互いの顔を知ること集落の運営、維持、管理が円滑に進むと実感している。助け合うことのできる関係はこういう場所ではなければ築けない。そこがすごく良いところ。協力隊の存在が世代間の隔たりを繋ぐ地域の橋渡しになれるのではないかと考えている。

地域から借りている一軒家では、敷地内の土地を耕して野菜を作り、手作りした小屋でヒナから育てた鶏を飼い、採れた卵で料理を作る。休日には寺泊などへ出掛け、買った魚をさばいて刺し身にするなど生活を楽しんでいる。また、プライベートでは地域の人たちに誘われて米作りの作業を手伝ったり、山でのキノコ採りやバーベキュー、スキー、カヤックでの海釣りなど「地域の人たちに良くしてもらっている」と感謝する。

農業の他にも、パソコンをパーツから組み立てるなどの技術を持つ野々垣さん。同じ協力隊の山田さんと共に、営農組合の作業が落ち着いた冬の間は「スマホ・パソコンおたすけ教室」を毎週開催した。今年は、ドローンを購入して地域の映像を空撮し、フェイスブックにアップするなど、新しい試みも始めている。



facebookも
チェック!

お問い合わせ

☎kz.kyouryokutai.yt@gmail.com

